【最優秀賞】

団体名	茨城県立水海道第一高等学校
活動の内容（概要）	本年度から総合的な探究の時間を「海高式探究プログラム」と銘打ち、実績のある教育ベンチャー企業５社と協働し、教科横断的な５分野の中から１、２年次の生徒自らが１つを選んで学べるプログラムを開発・運営している。また、放課後に実施する希望者参加型の「海高クリエーティブスクール」では、昨年度に引き続き様々な分野で活躍する講師を招き、開放的な空間のセンターホールにおいて専門家と交流できる機会を設けている。

受賞理由（審査委員からのコメント）

〇高校生の発達段階、学習指導要領を考慮した取組である。

〇継続年数は短いが民間から管理職が登用され、キャリア探究部が組織されるなど改革が始まり始めている風土が見られる。特に「海高式探究プログラム」の５分野の設定は生徒の主体的な学びに大きく寄与する仕掛けである。個人的にはＣＳを毎月１回開催する姿勢はまさに学校だけではなく、多様なステークホルダーでスクラムを組みながら生徒をサポートする覚悟が伺える。プログラム開発も教員と企業との連携のみならず生徒とともに探究テーマを発展させるチャレンジも良い。

〇教育ベンチャーとの強い連携という民間活力の活用型モデルということで、それぞれの企業が持つ特色あるプログラムやノウハウが活用できるのも、キャリア教育での大きなメリットと感じられる。５分野で設定している独自の能力育成を行っている内容も、とても実践的であり未来志向の企業などから高く評価されるだろう。多様な講師を活用できるのも民間活用のメリットであり、ＥＸＰＯも楽しみな活動である。

〇公立学校の校長に企業人が就任したことを契機に、県外のベンチャー企業など幅広い主体と連携し、５つの分野に関する興味深いキャリア教育を実施している。

〇他校の取り組みもそれぞれに重要であり、評価できるが、この学校の取り組みの中身は濃いように感じた。

〇中身の高さを評価したい。

〇協力性において、行政、地域がもう少しかかわると地域において閉鎖的に感じられないのではないか。ただ連携企業とはかなり濃密な協働になっており、学校が目指す成果に至っているものと思われる。発展性においては、海高探求で校外の様々な知識、人、情報に触れることによってキャリア選択の幅が広がりキャリア教育の成果が期待できる。

連携・協働している機関や団体，組織

【教育関係者（学校、教育委員会等）】

茨城県教育委員会（県立高等学校等チャレンジ・プロジェクト）

【行政（首長部局等）や地域・社会（ＮＰＯ法人やＰＴＡ団体等）、産業界（経済団体や企業等）】

海高式探究プログラム（以下、海高探究）では、株式会社 BYD、株式会社ガイアックス、株式会社ミエタ、株式会社トゥワイス・リサーチ・インスティテュート、株式会社インセプタム、Edv future 株式会社、

海高クリエーティブスクール（以下、海高ＣＳ）では、株式会社意味と衝動、東京大学経済学部片平ゼミなどと連携、協働している。

活動開始の経緯

本年度から総合的な探究の時間を「海高式探究プログラム」と銘打ち、実績のある教育ベンチャー企業５社と協働し、教科横断的な５分野の中から１、２年次の生徒自らが 1 つを選んで学べるプログラムを開発・運営している。また、放課後に実施する希望者参加型の「海高クリエーティブスクール」では、昨年度に引き続き様々な分野で活躍する講師を招き、開放的な空間のセンターホールにおいて専門家と交流できる機会を設けている。

「協力性」についての具体的な取組，工夫している点など

海高探究は、本校の理念である「面白い！から学びがはじまる」の中核として位置づけている。その意向や方針を提携する企業と共有するため、今年度の海高探究が始動する前に本校校長、キャリア探究部、そして協働する５社を交えてオンライン会議による打合せを繰り返した。学校側からの一方的な依頼のみではなく、各企業の特色を生かしたプログラムをどのように運用していくかを議論した結果、各分野の専門性に特化した展開へと繋げることができた。また、５社それぞれにキャリア探究部から教員の担当を配置し、かつ、グループチャットや１対１のメッセージのやり取りが簡易にできるチームコミュニケーションツールを活用することで、綿密で機敏な打合せや関係者全員での情報共有を可能としている。毎月１回の頻度で実施する海高 CS においても本校校長、キャリア探究部、そして講師による事前のオンライン会議を原則とし、本校の理念を共有した上で講師の特色を展開できる体制づくりに留意している。講師の要望によっては一斉講義やグループ講義などで展開し、定型化しない新鮮さのある運営を図っている。

「継続性」についての具体的な取組，工夫している点など

海高探究については、令和４年度に年間を通して実施した課題研究の内容を精査し、発展させることで開発された。その準備期間を経て、令和５年度では校内年間行事予定の中で実施日が設定されている。年間計画としては、①探究基礎（探究活動の意義と手法について）、②専門基礎（各分野に分かれ、その専門性についての学び）、③フィールドワーク（各分野に関連する施設の見学や専門家による講義の聴講）、④プレゼミ（所属するグループでの探究活動）、⑤海高ＥＸＰＯ（研究成果発表）の５段階に分かれている。これらについては校内ではもちろんのこと、連携する各企業とも年度当初に共有することで、各分野での具体的な年間予定についても作成している。各回実施後には生徒アンケートを実施しており、その結果を企業と共有することで改善に繋げている。連携企業では連絡ツールを活用して実施回の分析を行い、８月には全企業参加による振り返りや今後の課題についての会議を実施した。また、海高ＣＳについても令和４年度から実施されており、その事例を参考にしながら令和５年度の内容について計画している。毎回参加生徒からのアンケート調査を行っており、令和４年度の調査で評価の高かった講演についてはより発展させた内容で令和５年度版として実施している。

「実践性」についての具体的な取組，工夫している点など

社会で求められる能力の育成を目指し、海高探究では①アート＆コミュニケーション、②ソーシャルイシュー＆コミュニティ、③アントレプレナーシップ＆マーケティング、④デジタル＆イノベーション、⑤ネイチャー＆サイエンスの５分野を設定している。①については演劇を題材に、他者と協働して１つのものを作り上げる体験をすることでコミュニケーション能力やプレゼン能力の向上を図っている。②では地域課題を主題としており、本校生徒にも出身者が多い地元常総市が抱える課題について気づき、改善策を模索・提案する分野としている。③では起業や商品開発体験に取り組み、生徒から出てく

る柔軟なアイデアを具体化するところまで誘導し、各種コンテストへのエントリーに挑戦している。④は生成ＡＩや ChatGPT などの最新コンテンツについて学びながら体験し、それらをどのように活用できるのかを探究する分野としている。⑤では不変でありながら常に進化する科学について、実際に専門としている研究者の研究事例からその意義や手法を学び、新奇性のあるテーマを設定しながら科学研究の過程をたどる分野としている。これらの５分野において、専門性が高く教員の知識・技能が不足する部分については連携企業に一任しており、その際の教員は生徒と共に伴走する役に徹している。海高ＣＳにおいては社会における最新の話題や生徒の需要を意識し、それらに応じた講師を選定している。

＜海高式探究プログラムデジタル＆イノベーショントラックにおけるドローン操縦体験＞

「発展性」についての具体的な取組，工夫している点など

海高探究では、各分野における連携企業を中心に、必要に応じて様々な専門家などとの協働にも取り組んでいる。例えばデジタル＆イノベーションの分野では連携企業との関連でＶＲの研究者による講義を実施したり、ネイチャー＆サイエンスの分野ではサンゴの研究者やサイエンスエンターテーナーによる講義を実施したりしている。１１月には分野毎のフィールドワークを予定しており、連携企業との協議により関連する専門施設への訪問と、所属している専門家からの講義を聴講することで自身の探究テーマ発展の機会としている。大学を訪問する分野では在籍している本校卒業生にアポイントを取り、現在の研究活動について紹介してもらう機会を設けている。また、目標の一つとして各種コンテストへのエントリーや入賞を掲げており、IBARAKI ドリームパスや TOKYO STARTUP GATEWAY に応募している。海高 CS では、毎月の開催頻度に合わせて多様な講師を招いており、毎回異なる分野の専門家から講義を受けられるように設定している。５月には CM プランナーによる「面白い！つくり方」、６月には現役東大生による「勉強とは？」、７月には本校校長による「世界のアイデアを学ぼう」をテーマに実施し、参加した生徒からは講師を驚かせる質問も飛び交っていた。大学や社会で活躍する人物と交流することで、平素の学校生活では学べない貴重なキャリア教育の場となっている。

学校現場の評価・感想・コメント

「起業の基本となることを詳しく、分かりやすく知れた。」「知らない人と会話して自分と異なる意見に触れることができ、自分の考えが広がった。」「テーマを決めるために自分の興味のあるものを掘っていく作業をした。野鳥と香りで迷ったので身近で研究できそうな香りにしようかとおもっている。」「（講師が）白子町で病院をやっているだけではなく、いろいろな活動をしていてすごいなと思った。また、少子高齢化についての質問の時に日本ではなく世界に目を向けて答えていてとても印象に残った。」（海高探究生徒感想）

「クリエイティブはコミュニケーションだと先生はおっしゃっており、理解すると同時に自分は話すことが苦手で人見知りなのだが、出来るだけ課題解決に向けて取り組んでいきたいと思った。」「テレビを見るのが好きなのでよく見ている CM を作っている方の話を聴けているのがずっと不思議な感覚だった。色んな活躍されている方のお話を聞く機会は滅多にないと思うので、次回もあったら参加したいと思う。」「自分が悩んでいたこととかを実際に東大生の実体験や勉強法を知ることが出来てこれから活かしていきたいと思った」「カンヌライオンズの受賞作品を見て、クイズを交えながら広告の伝えたいことをわかりやすく教えていただいたのでとてもわかりやすく有意義な時間だった。」(海高 CS 生徒感想)

＜海高クリエーティブスクールにおける東京大学片平ゼミ生による「勉強ってなんだ！？」＞

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

海高探究連携企業５社からのコメント：

① （BYD）生徒が社会と繋がるために、積極的に企業や社会人と協力し合う仕組みが素晴らしいと思った。加えて、先生方が学ぶ姿勢、新しいことに挑戦しようという姿勢があり、とても良好な関係性を築けていることが、学びの質に繋がっていると感じている。

② （ガイアックス）生徒が自分の興味・関心から自らコースを選び、各界の最前線で活躍する企業と 1 年間のプログラムを実施できることは探究の理想である。学校現場ではよく「地方の公立校では面白い実践はできない」と言われるが、今回の取り組みは全国の先生のそんな思い込みを打ち消してくれることだろう。

③ （インセプタム）生徒自らがテーマを設定して実践的な研究活動に取り組むことで、大いに探究心が刺激されるものと思う。また、企業が講師をすることによって、生徒たちが普段はなかなか接することのない話題に触れる良い機会になると感じている。

④ （ミエタ）社会課題解決のフロントランナーである講師とともに、生徒さんが感じる社会課題の解決に取り組む本プログラムの経験が、生徒一人ひとりの興味・関心や将来の進路といったこれからの「キャリア」に落とし込むことができる機会になっていると感じている。

⑤ （トゥワイスプラン）学年やクラスを越えて一つの成果を創り上げるという過程で、生徒のみなさんは協働的かつ創造的な学びを行っている。社会との繋がりの中で自分の得意なことや好きなことに気づき、将来について主体的に考える機会になっている。